

【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅 ()
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 (補助金) 内閣府 国土交通省 厚生労働省 ()
 〔建物形式〕 1棟単体型 複数棟集合型 団地型 (建物状況) 新築 増築 改修 一部改修 既存
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真 1. 建物外観

シュタイナー教育の考え方を取り入れつつ、仏教の教えに基づく教育・保育を行っている。自分の手を足を、五感を使って遊ぶこと、人との関わりを学ぶこと、そして自然の環境で体験することを大切にしている。縦割り保育では、特別だという意識のもとで年長児が伸びることで、年中、年少も伸びていくことを目指している。不整形の保育室や多様な要素のある園庭が特徴的。

■施設概要

所在地：東京都葛飾区東金町 2-25-12

施設種別：幼稚園

運営主体：学校法人 東江寺学園

設計監理：村山建築設計事務所

敷地面積：498㎡

延べ床面積：902㎡

構造規模：木造 2階建て（一部 RC 造）

開所：1949年

見学・訪問：2012年2月14日（山田あすか、古賀政好、小林陽、アマングリトウリソン）、2014年9月26日（山田あすか、他）、等



図 1. 周辺状況（国土地理院より引用*）

周辺には保育園や小学校がある。低層住宅地のなかに位置し、母体施設の寺境内が隣接する。金町駅、もしくは京成金町駅から徒歩約 16 分。

■運営概要

東江幼稚園は、シュタイナー教育の考え方を取り入れつつ、仏教の教えに基づく教育・保育をおこなっている施設である。「からだを育てる、人と関わる力を育てる、感性を育てる（自然から学ぶ）」ことを大切にしている。手足を使って裸足（素足でわらじ）での生活、調理や工作、どろんこ、木登りなどで幼児期に大切な「五感を育てる」活動をしてからだや感性を育てている。幼稚園に入る前までは、家庭を中心に育っている子どもが多い。しかし



写真 2. 不整形の保育室の様子

シュタイナー保育の考えにより、保育室は不整形である。内装や外装だけではなく、イスや机などの家具も自然素材を使っている。



写真3.2 階バルコニーの様子

2階の保育室からバルコニーを通過して園庭に出られるようになっている。

幼稚園に入園すると、友達ができて助け合ったり、けんかしたりすることで子どもたちは育っていく。また、こどもは上の子の真似をすることで自然に学ぶものである。そのため、縦割り保育にすることで同年代だけでは学ぶことのできない役割を経験して、人と関わることを学ぶ。

園庭は土で、裸足でも心地よく、雨上がりにはどろんこ遊びをすることができる。畑で育てた野菜を取って食べたり、かまどで子どもたち自ら食事をつくったり、うさぎに餌をあげたりすることで、自然の環境を学んでいく。

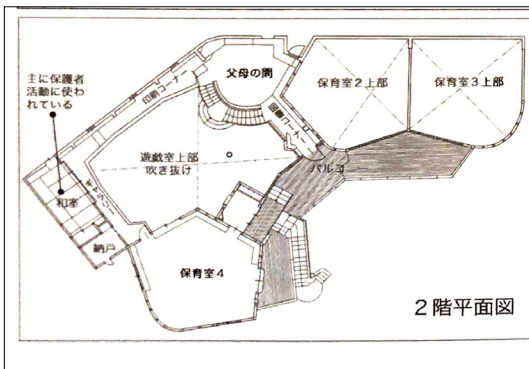


図2.2階平面図（日本建築学会（2014）『こどもの環境づくり事典』青弓社より引用）

四角い部屋がなく、多角形で構成されている。

■運営状況

園児数は125人で、各学年40人と少ない。満3歳児は、以前は受け入れていたが現在は受け入れていない。1998年から縦割り保育を実施しており、1学年10人ずつで、30人1クラス、計4クラスある。1クラスに、担任は2人いるため、集団と個を同時に相手することができる。それから、プロの版画家さんが用務員さんとして勤務しており、木工や調理活動の際には指導をしている。活動

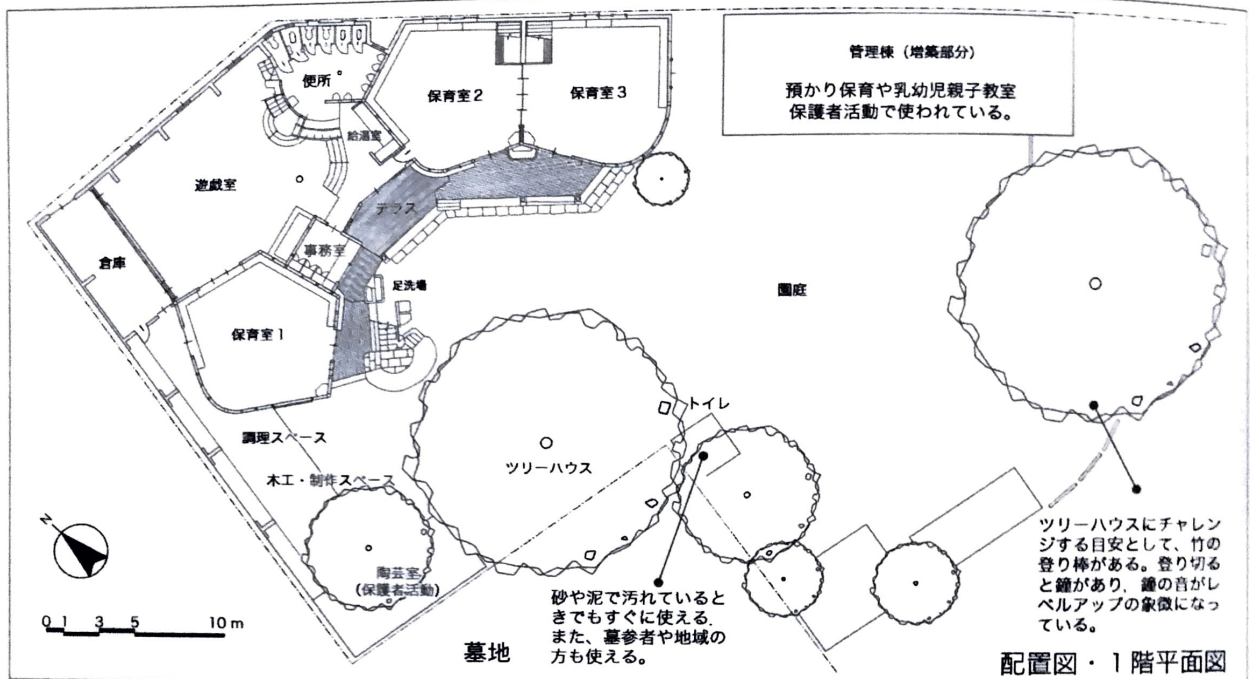


図3.配置図・1階平面図（日本建築学会（2014）『こどもの環境づくり事典』青弓社より引用）

部屋は遊戯室を中心に1階に3つの保育室があり、園舎の前にはツリーハウスがある。外遊びで汚れていても使えるトイレが外に設置されており、保護者や地域の人向けのトイレとしても利用される。

によって横割りもあり、公園へサイクリングの練習などは横割りで行う。2、3ヶ月に一度、横割りの活動も行っている。卒業するまで同じクラスで、トレードはしない。

■施設環境

1) 園舎の特徴

園舎は四角い部屋がなく多角形（鈍角）で構成されている。外観は特徴的で、こどもや親たちのシンボルとなっている。内装や外装、家具には木や土などの自然素材を使用しており、自然の暖かみを感じる空間となっている。

ホールには多くの段差があり、吹き抜けを囲む2階部分に上がる階段も、ホールと連続して設けられていて、これらの段差を利用してこどもたちは遊んでいる。トイレも温かみのある照明器具と木の床によって明るい空間となり、こどもたちの遊び場となっている。階段や段差をつくることでできるでこぼこの「バリア」は挑戦や活動を誘発するものである。ホールの一角には須弥壇があり、仏画の掛け軸が飾られている。こどもたちは特に気にせず、仏像の前の段差を利用して遊んでいたりする。

このホールの段差の床下には、収納スペースと年長児が卒園する際に回る「胎内巡り」のルートが設けられている（このことは、それを体験するときを迎えた年長の園児以外には秘密にされている）。いつも胎内巡りの空間に入ることができないのは、普段の生活を支えている見えない世界があるという仏教の教えを空間化したためである。宗教的な活動は表に出していないが、日常生活のなかに仏教的メッセージが虜編まれている。

この園では障害児も受け入れているが、肢体不自由のこどもも、本人の努力と園児同士の助け合いで楽しい園生活を送っている。バリアがない環境ではなく、バリアがあってもみんなで乗り越えられるような環境づくりに取り組んでいる。

2) 異年齢の関係づくり

こどもたちの関係づくりにも力を入れている。一人っ子が増えていることも背景に、きょうだい児との関わり機会がもたらしていた学び合いやいたわり合いの関係も現代的な環境で体験して欲しいというねらいがあり、異

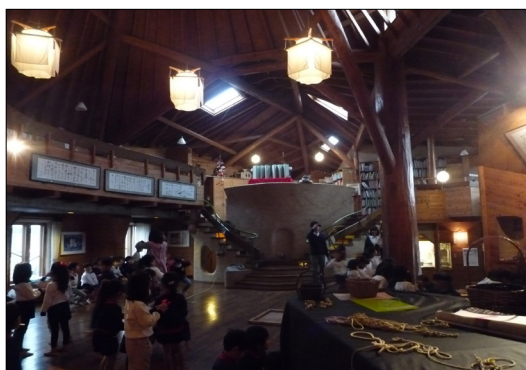


写真5. 遊戯室の様子

遊戯室は高床になっていて、下の空間には収納スペースがある。



写真6. 隠れ場

階段の下のトイレと遊戯室の間の空間には隠れ場がある。こどもこどもたちの遊び場となっている。



写真7. ホールにある須弥壇で遊ぶこども

参考文献

- 1) 東江幼稚園 HP (<https://xn--hds75os2hijfg1t.jp/concept/communication/>) 2020年11月3日参照
- 2) 日本建築学会 (2014)『こどもの環境づくり事典』青弓社



写真8. ホールにある特徴的な階段

ホールの上部は図書コーナー。特徴的な屋根を支える小屋組が間近に見える。

年齢保育を行う。また、年長児と年少児、年中児同士が同じロッカーを使う「ペア」を組むペア活動をしている。ペアになったこどもたちは、お互いに頼ったり守ったりし、兄弟がいない子にはとても貴重な体験となっている。

3) 園庭の特徴

園庭では、高い木にあるツリーハウスが設置されている。このツリーハウスは園舎の2階からも見えるが、登った時の達成感を強いものにするため、2階の床よりも高い位置に作られている。登り始めのところが最も難しく、誰でも簡単には登れないようになっている。身体の寸法や身体制御の能力が不足している場合にはそもそも登れないので、これが高所にツリーハウスがあっても安全であることに繋がっている。この考え方は、川和保育園(→事例0261)で学んだという。ツリーハウスに登る前の練習場所があるため、こどもたちは自分の力を確かめながら、挑戦していくことができる。誰でも登れるわけではない



写真9. ホールにある特徴的な階段

曲線と円弧の連続が美しい。てすりの造形や色彩も穏やかである。この階段もこども達の遊び場所となる。

ため、ツリーハウスに登れなかった子どもたちが、卒園後に訪れて再び挑戦することもある。

このような、卒園してからも遊びたい場所があり、縦割りクラスのため仲のいい園児が幼稚園に残っていることで、卒園後にも園を訪れやすい。卒園後も育った環境との関わりを持ち続けられることは、とても価値がある。

見学時のヒアリング (2012.2.14)

●園舎との関わりについて

他の幼稚園と比べて、小学校になっても休みの日などに遊びに来てお話ししたり遊んでいく子どもが多い。縦割り保育でかつクラスが固定なので、卒園してからも2年くらいは知っている子がいるため戻ってきやすいというメリットにも繋がっている。また、卒業生だけの集まりも年に6回あることも影響していると思われる。

●障害児の受け入れについて

肢体不自由の子どもは、いままでに1人のみ在園していた。ダウン症の子どもで、筋力が弱いなどの身体的に配慮が必要な子どもは年に数人いる。子どもたち同士で育っていくように職員がサポートする。キャパシティもあるため、障害のある子どもは、各クラス1人を目安としているが2人ずつ+αがいるのが常態である。障害のある子どももしっかり受け入れていきたいが、他の子どもにも保育・教育を行き届かせるために、誰でも何人でもどうぞというわけにはいかない状況である。

●人間関係について

卒業するまで同じクラスが原則である。全体のバランスをみて、この組合せならば子どもが力を発揮できそうだと、など見ながら決めていく。なにか問題があっても、つきあうか我慢をするか、それもまた学びの機会となる。

ペア活動では、頼ったり、守ったりの関係ができていく。ときには担任の先生よりも、ペアのお兄さんお姉さんを心の支えにしている子どももいる。折り紙をしてくれた、など、ちいさなこともよく覚えていて、自分が上になったときに、下にしてあげたい、など年長ロールモデルを提供している。このペアは1年ごとの固定で、うまくいかないときには組み替えもある。クラスは組み替えないが、ペアの場合は集団が小さすぎるので逃げ場がなく、



写真 10. ホールで遊ぶ子ども

雨天時の遊び場等として、日常的に使われている。



写真 11. ひなかざり

季節の行事などを大切にしている。



写真 10. ツリーハウス

以下写真

夏の園庭の様子。大きく育った木々の緑陰が覆う泥場、土山はひんやりとしている。ツリーハウスの木々の葉に少し隠れて、隠れ家の感覚を増している。ツリーハウスは登った時の達成感が味わえるよう、2階よりも少し高い位置にある。年長児でも達成者は半分程度。



組合せによって、こどもの自己肯定感がさがったりすることもあるので、組み替えも有りになっている。在園児は性格などよく分かっているが、3歳児で就園したばかりの子はまだ性格など分からないことがあるので、ペアをつくってみて合う・合わないが分かるということがある。

(作成者：東京電機大学 林志伸 2020.11,
加筆・校正 山田あすか)







